

家族人形



黒犬ちわわ

その国では、五歳になった子供たちへ、人形が配られます。

それぞれ配られる人形は、公平にランダムで決定されます。好きな人形を選ぶことはできません。

子供たちの手に渡った人形は、様々な運命をたどりました。

新しい家族のように愛され、一生大切にされる人形もいました。

しかし、ひと目見ただけで、気に入らないと言われ捨てられる人形もいました。

人形なんかいらないと、送られてきた箱すら開けないまま放っておかれる人形もいました。

最初こそ可愛がられますが、すぐに飽きて部屋の隅にころがされ、ほこりをかぶる人形もいました。

手足をもぎとられ、ばらばらにされ、元に戻せないとわかるとゴミ箱に入れられる人形もいました。

お友達がもらった人形のほうが可愛く見え、交換し合い、人の手を渡る人形もいました。

親が取り上げて、豪華な衣装を着せたあとに立派なガラスケースに飾られ、訪問客が来るたびに自慢される人形もいました。

子供が不幸にも死んでしまい、棺の中へいっしょに入れられる人形もいました。

そんな人形たちのなかの、あるひとつの物語です。

その人形は、送られていった先の子供に、深く愛されていました。しかしその子供は交通事故にあい、死んでしまいました。亡くなった子供の親は、棺の中へ人形を入れるのを強く拒みました。

あの子が愛した人形だから、私たちが愛しつづける、と。

人形は本当の子供のように愛されました。

まるでまだ子供が活着ているかのようです。子供が座っていた席に人形が座り、食事も用意され、毎日服も着替えさせられました。

時々散歩にも連れて行ってやります。その時は、車に充分注意しました。また我が子の命を奪われるわけにはいきません。

夜は、ベッドで眠らせてあげます。横になったあとも、しばらく母親が子守唄を歌ってあげました。

子供のほうは何の反応もしません。親がいくら愛情をかけても、黙ったままです。そのおかげでしょうか、親の愛情はますます強くなるのでした。

以前の子供は反抗をする年になっていましたが、今の子供は優しい顔のまま親の言うことを聞いてくれます。元気がなくなった時には、その笑顔で労わってくれているようでした。今の子供こそ本当の子供なのだと思ってしまう時がありました。

しかし、人間とは気紛れなものです。ある日、以前の子供の顔が突然思い浮かび、無性に子供との思い出ばかりが頭をめぐって、もう一度子供に会いたいと両親は叫びました。

そうなる、今の子供が憎らしくなってきました。自分たちで子供にすると決めたのに、

「この嘘つきめ！」

と人形を罵り始めました。

子供の使っていた部屋からは追い出され、食事も与えられず、物置の中へがらくたのように押し込まれました。

そのまま忘れ去られていた人形は、数日後、物置を開けた母親と顔を合わせました。以前は愛くるしかったその顔も、今では嫌悪の対象でしかありませんでした。人形は、服を脱がされ、外へと連れて行かれました。

空地の隅で人形は何日も過ごしました。関節の継ぎ目を覗かせ、雨風にさらされて汚れた人形は、誰も人間として見てくれません。体を幾重にも折り、人間ならずで死んでいるような体勢で、顔は一心に天を向いたまま、優しく微笑んでいます。

やがて、両親が空地へ戻ってきました。

「ごめんね」

と言って人形をなでてあげました。汚れた人形を大事に抱きしめ、家へと連れて帰りました。

また元の生活に戻ったようでした。人形には傷ができ、おかしい方向へ曲がっている指もありましたが、以前のように食卓へ座らされ、新しい服も与えられ、ベッドで寝かされました。

幸せな生活が長く続きました。両親は年が経つごとに老けましたが、子供は年をとりません。いつまでも愛くるしい姿のままです。その子供の体にある、治らない傷痕を見るたびに、両親は心を痛めるのでした。

父親が先に亡くなりました。残った母親は、いなくなった父親のぶんまで子供に愛情をそそぎました。たくさんある家族の思い出話を、母親は子供に語って聞かせました。何度も何度も、繰り返し話しました。子供は、何度も何度も、辛抱強く席を立たずに聞いていました。

そして母親も亡くなりました。家の中には、腐っていく母親の体と、その臭いを感じることができない子供だけがいました。子供はただ黙って、動かずに、変化していく母親を見つめていました。

数週間経って、ようやく誰かが家に入ってきました。原型を失った母親の体は片付けられ、家の中の物も少しずつ外へと持ち出されていきました。

入ってきた誰かが言いました。

「この人形はどうしようか」

別の誰かが言いました。

「汚いし、捨ててしまおう」

「でも、大切にしていたようだから、棺に入れた方がいいのでは」

「あんな体の母親に、棺は必要ないだろう」

結局捨てることに決まったようで、他の物といっしょに人形は乱暴に投げ置かれました。これらは後でまとめて捨てる物です。

「あれ、ここにもあったぞ」

他の部屋を調べていた誰かが言いました。その部屋の物置で別の人形を見つけたのです。奥に隠されるように、二体の人形が置いてありました。

それは両親たちが子供のときにもらった人形でした。大人になるまで大切にし、結婚したあとまで連れていきました。人形を愛する心が、通じ合ったのかもしれませんが。そんな二人でも、自分たちの子供ができると、人形に構うことができなくなりました。長年愛した人形ですから、捨てられずに物置に仕舞っておいたのです。

二体の人形は、先程の人形と同じ場所に投げられました。三体の人形は、お互い持たれかかるように重なりました。まるで仲のよいもの同士で肩を寄せ合っているようです。

その上にまた別のゴミが投げられると、人形たちは重みで潰れていきました。体はばらばらになり、どれが誰の物だったかもう区別がつかいません。

ひとつかたまりとなった人形は、ゴミとして収集され、燃やされ、灰になりました。

家族人形

<http://p.booklog.jp/book/8012>

著者：黒犬ちわわ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bwolf/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/8012>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/8012>